

特 集

心理学部設立記念シンポジウム 「跡見学園女子大学と臨床心理学—その未来へ」

日時：2018年5月20日(日) 14:00～16:00

会場：跡見学園女子大学文京キャンパス ブロッサムホール

シンポジスト：平木 典子先生（元跡見学園女子大学大学院教授・現 IPI 統合的
心理療法研究所顧問）

鶴 光代先生（元跡見学園女子大学教授・現東京福祉大学教
授・現日本心理臨床学会理事長）

野島 一彦先生（跡見学園女子大学 心理学部長）

司会：松寄くみ子先生（跡見学園女子大学附属心理教育相談所所長）

進行：前場 康介先生（跡見学園女子大学講師）



○前場 皆さま、本日はお忙しいところ、
跡見学園女子大学心理学部設立記念シンポ
ジウムにご参加いただきまして、誠にあり
がとうございます。本日の進行役を務めさ
せていただきます、本学心理学部講師、前
場康介と申します。どうぞよろしくお願

いたします。

シンポジウム開始に先立ちまして、会場
のご案内をあらためてさせていただきます
。お手洗いは、会場を出られましてすぐ
左手側でございます。また、館内は全館禁
煙となっておりますので、喫煙をなさる方

は、屋外にございます喫煙所をご利用ください。こちら2号館の建物を出られてすぐ右の突き当たりでございますので、そちらをご利用いただければと思います。

シンポジウムの開催中につきまして、携帯電話の電源をオフまたはマナーモードに切り替えていただきますよう、ご協力のほどよろしく願いいたします。また、本日は撮影を行わせていただいておりますけれども、皆さまの顔が写るようなことはございませんので、ご安心いただければと思います。また、個々人さまによります音声の録音、あるいは写真、動画の撮影はご遠慮いただいておりますので、こちらもどうぞご協力のほどよろしく願いいたします。

それでは、シンポジウムの開演に当たります、本学学長、笠原清志よりご挨拶をさせていただきます。笠原学長、よろしく願いいたします。

開演挨拶 笠原清志先生(跡見学園女子大学 学長)

○笠原 ご紹介いただきました、跡見学園女子大学学長の笠原でございます。今日は心理学部設立記念シンポジウムにご参加いただきまして、ありがとうございます。大学を代表し、お礼を申し上げたいと思っております。

跡見学園女子大学は、今年の4月に、従来文学部臨床心理学科であったものが、野島先生の強いリーダーシップの下で心理学部として設立され、今日、大きく発展する可能性、チャンスを得たのではないかと思っております。その結果、この心理学部の設立により、4学部2大学院研究科の体制になり、女子大学としても中規模の、四

つの学部を持つ女子大学としてあらためてスタートすることが可能になりました。

ところで、今日、「心の時代」という言葉をよく耳にするように思います。私は、20世紀が戦争と革命の時代であるとするならば、それは近代文明社会が外に向かって拡大し、その結果、戦争と革命の時代、人間の理性が何でも世の中を変えられるという理性に対する過度の確信、そういったものが20世紀の悲劇を大きく作り出してきた原因の一つであると思っております。

他方で、21世紀は自立と共生の時代であるといわれております。その自立と共生の背後にある基本的な考え方は、やはり個性を重んじる心の問題、一人一人の心の在り方、こういったものに対する時代の要請というものが、21世紀の自立と共生という言葉、概念に表れているのではないかと思っております。

私たち跡見学園女子大学でも、跡見花蹊先生の教育観というものを考えていきますと、最初から独自の教育観があったのではなくて、時代の変化とともにその教育観が形成されてきたということを見ることができたと思います。特に、跡見学園女子大学の教育観、花蹊先生の教育観が形成された大きな転換点は、明治の初期の欧化主義、そして極端な、鹿鳴館時代に見られるような日本の文化伝統を軽視し、ヨーロッパ文化を過度にあがめる時代の風潮に対して、跡見花蹊先生が独自の教育観を形成していった大きな時代的背景があるような感じがいたします。そういったところから、日本の文化伝統に対する深い理解と、凛とした美しさ、自立した女性といった考え方が出てきたのではないかと思っております。

このように考えますと、今日、21世紀が自立と共生の時代であり、心の時代であると改めて認識する次第です。このように時代変化を理解するならば、跡見学園女子大学にとりまして、この心理学部創設はきわめて重要なことではないかと思っています。つまり、女子大で本格的な心理学部創設は初めてということで、今後の発展が期待されるのではないかと思っております。

この心理学部の設立は跡見学園にとりましても重要であり、花蹊先生以来の時代のトレンドを的確に見極めて、その時代の要請に応えるという教育理念が現実には制度化していった結果ではないかと思っております。関係するいろいろな方々のご協力を得ながら、野島先生のリーダーシップの下、心理学部が大きく発展し、跡見学園女子大学を代表する学部に育っていただきたいと思います。

今日はご出席いただきまして、ありがとうございます。今後、大学としても心理学部を支援し、大きく発展させていく考え方がありますので、ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。以上でございます。ありがとうございます。

○前場 笠原学長、ありがとうございました。

シンポジウム「跡見学園女子大学と臨床心理学—その未来へ」

○前場 皆さま、大変お待たせいたしました。ただいまから、記念シンポジウムを始めさせていただきます。それでは、シンポジストおよび司会の先生方、壇上の方にお上がりください。

では、ここからは、シンポジウム司会の



本学附属心理教育相談所所長、松寄くみ子に進行を譲らせていただきます。それでは松寄先生、よろしくお願いたします。

○松寄 皆さま、こんにちは。今日はようこそお越しくださいました。本日は、「跡見学園女子大学と臨床心理学—その未来へ」と題しまして、シンポジウムを開催させていただきます。

ご登壇の3人の先生方は、跡見学園女子大学の臨床心理学科を最初から今日に至るまで、そして心理学部になってからもずっと支えてくださっている先生方です。さらに心理臨床の領域でも、日本の心理臨床を引っ張っていただいている3人の先生方です。こんな豪華なメンバーでシンポジウムができることはめったにないことだと思っております。光栄に思っております。ありがとうございます。

まず、ご登壇の先生方をご紹介しますと

思います。最初にお話しいただきますのは平木典子先生です。平木典子先生は、元日本女子大学教授、元跡見学園女子大学大学院教授、元東京福祉大学大学院教授で、現在、IPI 統合的心理療法研究所顧問を務めておられます。また、日本家族心理学会元会長、日本カウンセリング学会理事などをはじめ、多くのお役目を引き受けてくださっています。跡見学園女子大学大学院では、その設立をご指導くださり、その礎を築いてくださいました。現在も跡見学園の理事を務めておられます。また、家族療法、アサーション、統合的心理療法を日本に紹介して下さった先生でもあられます。どうぞよろしくお願いいたします。

次に、鶴光代先生でいらっしゃいます。鶴先生は、日本心理臨床学会理事長、東京福祉大学心理学部教授、東京福祉大学大学院心理学研究科科長、元跡見学園女子大学教授、日本臨床動作学会理事長など、多くの役職をお引き受けになられております。また、日本で初めての心理職国家資格、公認心理師設立運動においては、指導者として牽引してくださいました。国から委託された公認心理師試験機関であります日本心理研修センター理事もお務めくださっております。どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、野島一彦先生です。九州大学名誉教授、跡見学園女子大学心理学部教授、前日本心理臨床学会理事長、元日本人間性心理学会理事長など、多くの役職をお引き受けになっております。また、日本で初めての心理職国家資格、公認心理師設立運動においては、指導者として牽引してくださいました。どうぞよろしくお願いいたします。

では、まず初めに平木典子先生より、「専攻立ち上げの理念と未来への期待」と題しましてお話を伺いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

平木典子先生「専攻立ち上げの理念と未来への期待」



○平木 平木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、跡見学園女子大学が心理学、特に臨床心理士の養成を目的とした大学院が設立される時にこちらに参りまして、学部立ち上げから縁があるのですが、大学院の心理臨床の養成コースを最初につくるところに関わりました。そういう意味で、皆さんのご希望でもありますけれども、学科を立ち上げたときにどんな思いを持ってここに伺ったかということ、学科を立ち上げたときの思いが、現在も先生方に引き継

がれて、その発展に私が今どんな希望・期待を寄せているかとかというお話をして、前座を務めさせていただこうと思っています。

新しい学科、学部を跡見学園に立ち上げたきっかけは、実は現理事長の山崎先生が、私が日本女子大にいたころ、定年退職の2年も前に、「退職後は跡見に」と声を掛けてくださいました。その理由は、大学が心理学科と臨床心理学専攻の大学院の設立にあたって、日本女子大の心理学科と大学院の教育・訓練の方針と方法を跡見でも実現してほしいということだったのです。私は日本女子大の心理学科の立ち上げにも最初から関わっており、当時は、臨床心理学担当の教員が3人もいる独特な心理学科でしたので、それを認めていただいたこともうれしく、勇んでこちらに伺ったことを思い出します。

というわけで、本日は二つの大学の学科と大学院の内容を重ねながらまずお話しして、その後に跡見学園女子大学の心理学部に期待することをお話ししていこうと思います。まず学科を立ち上げたときの理念は、心理学の基礎教育をきちんとすることによって、学部の卒業生たちの卒業後のキャリアに役立つ広い心理学領域の教養を身に付けてほしいということでした。

もう一つの目的は、臨床心理学専攻修士課程において臨床心理士を養成するカリキュラムを実施することで、その教育・訓練の内容とプロセスは、日本女子大の心理学専攻修士課程とほとんど同じでした。すなわち、心理的な支援を多様な現場で実践できる専門家の教育と訓練のプログラムを作るということで、汎用性のある実践力の

ある専門家を養成するカリキュラムの立案と実施にかかわったということになります。

「汎用性のある実践力」とは、1990年、日本女子大心理学科の設立当初の理念と目的でした。1990年代の初め、まだ、現在実施されている臨床心理士資格認定指定校の認定制度はなく、養成・訓練のカリキュラムもプロセスもそれぞれの大学の臨床心理学の教員の専門性にゆだねられており、九州大学と京都大学を除いては、複数の臨床心理学の教員が不在でした。多くの大学は臨床心理学専門の先生が1人という状況で臨床教育を行っていました。

ところが、日本女子大学では、心理学科を立ち上げるときの目的に臨床心理士の養成が組み込まれており、11人の心理学専攻の教員のうち、3人の新任教員が臨床心理学専攻で、他の8人は、心理学の8分野、認知心理学、発達心理学、統計数理、生理心理学、知覚心理学、ゲシュタルト心理学、社会心理学、そしてチンパンジーの研究を専門とされる先生方でした。そこに臨床心理学の3人が参加したという構成だったのです。

その3人はそれぞれ、交流分析、来談者中心療法、そして家族療法専門の私という構成で、専攻が異なる先生方とともに、臨床心理学に重点を置いた心理学科を立ち上げたのでした。

それだけの先生がいらっしゃるので、設立当初からキャリアに役立つ心理学の教育をするということが目的だったこともあり、卒業生がそれぞれの思いで専攻を選んで卒業論文を書くということは当たり前でした。そのため、各専攻の壁を高くしないで、垣根を低くして相互交流をしながらの

教育が実施されていました。例えば、3年次に2つのゼミに所属するのは当たり前で、4年生になっても、希望すればそのまま続けることができ、学生も教員も相互交流が自由でした。異なる専攻をもつ11人の教員が、一方で博士課程の学生を育てながら、和気あいあいと教育実践をしていたということが出来ます。

そこで、私たち教員がねらっていたことは、学生が多様な心理学の専門領域に接して多角的な理解を深める試みをしてほしいということでした。今、日本女子大の卒業生に話を聞くと、「あのときは、大変でしたよ。よく分からないから、あれこれに挑戦しましたが…」などと、まんざらでもない声で言っていました。それをどうにか自分たちの教養として学びを統合して、自分たちの将来の仕事や生き方に活かしてほしいというのが教員の願いでした。

例えば私の例で申し上げますと、学部の卒業論は調査研究を行うよう勧め、事例研究や質的研究は大学院でと伝えて、数理統計の先生のゼミを同時に履修することで、臨床の大学院に進む場合も、就職する場合も両専攻の教員の教えを受けることができるようにするといったことを試みておりました。

その成果なのか、キャリアセンターの人たちからは、「心理学科の学生さんは自分のことをよく分かって就職相談に来るので相談がしやすいという評判をもらうようなことが実現できていました。その結果、卒業生はそれぞれの学びを生かしてIT関係の就職先を探す者から、企業の健康保健関係の部署や人事などに関心をもつ学生が出ていました。大学院は臨床心理士になるために進学する学生が多いので、8割が臨床

心理学専攻です。当時はその教育・訓練モデルがない時代でもあり、その大学院の修士課程のプログラムを作り上げながらの教育でした。

モデルはないながら、3人の教員は異なった臨床実践のバックグラウンドを持っていましたので、それをどうにかして訓練に生かしたいということで、一番力を入れたのがスーパーヴィジョン、いわゆる実地訓練をどのようにするかということでした。これも垣根を低くして、3人のスーパーヴィジョンをどの学生が受けても違和感がないように、基本的なことを身に付けるということのをねらったスーパーヴィジョン体制を作り上げました。臨床心理学専攻課程のプログラムも同様、「汎用性のある実践力」の育成でした。つまり、大学院2年間で臨床心理士になることができる実力を身に付けるということは、精神分析家になるわけでもなければ、認知行動療法の専門家になるわけでもなければ、何々療法といわれるものの専門家になることをねらいとせず、特定の流派の実践教育をしないとせず、それを学ぶことは止めないけれども、心理臨床の職場は広いので、どの職場に行っても自分なりに臨床がすぐできるような学生を育てるということでした。

そのときの学部、大学院を通しての特徴は、お分かりのように、心理学の多領域専門の教員が、心理学の基礎教育を行う。例えば、その実現には、学部1年次の「心理学基礎演習」(日本女子大の科目名)では、1年間に四つの専門の先生たちのゼミを受けるというもので、11科目必須のうち4科目を1年間にゼミ形式で学び、1年次に心理学の各専門領域のイメージをつかんで専

攻領域を決める支援をする。その専攻を将来に活用することに加えて、全体の目的としては、心理学を学ぶことによって自己理解と他者理解を促進することでした。最近のこちらのカリキュラムを見ると、その考え方は引き継がれているように思います。

さて、次に「心理臨床の実践家を養成する大学院カリキュラム」ですが、臨床心理士の資格試験制度では学部の専攻が心理学でなくてもよかたので、とにかく2年間で、汎用性のある心理支援の仕事ができる人たちを育てる必要がありました。そのため、スーパーヴィジョンに力を入れたのです。例えば、グループスーパーヴィジョンに複数の教員が出席するとか、複数の教員からスーパーヴィジョンを受けることができるといったことに加えて、基本的な実力の育成を図り、実習の現場も、これは後で野島先生がお話ししてくださると思いますが、地域支援とか多領域の現場に広げた協働の体験をするというようなことを試みました。

このような試みは、今、ふり返っても大きく間違っていないかと思うのですが、何よりも、皆さんに続けていただきたいのは、日本女子大の心理学科も跡見学園女子大学の心理学部も前例があまりないところでの新たな出発です。一言でまとめると、臨床心理学を応用心理学の一つにしないということです。かつて、臨床心理学は心理学の応用分野の一領域でしたが、応用心理学の一分野にしないで、むしろ「臨床の知」から生まれる学科、学問にしていきたい。そのような思いをこれから一言お話しして、私のお話を終わりたいと思います。

先ほど学長先生が「21世紀」とおっしゃいました。21世紀はグローバルな規模で世界が変わっている時代です。私自身はグローバルな視野を持って生きてきたとは言えないので、自分の生き方とは反対のことを申し上げたいのですが、将来への展望とか期待とか希望は、夢のようなことを言うのでなければ、大きく持っていただきたい。跡見学園女子大学の心理学部は、新たな公認心理師養成の最先端を歩んでいかれるわけなので、ぜひ新幹線にさせていただきたいという思いがあります。

新幹線というのは、新しい路線を創ることによって、次世代の臨床心理学と心理臨床職養成のモデルと刺激になることです。跡見は、今、公認心理師養成の中で心理学部の臨床心理学専攻大学院がイニシアチブを取っていくチャンスをもっている大学だと思っています。日本の心理臨床専門家養成が世界に比べて遅れているということは、多くの方がご存じだと思います。臨床心理士資格認定協会と心理臨床学会のリーダーシップが質の向上と養成の方法などに大きな貢献をしてきたとは言え、国家資格化がここまで長引いたことは、他の質の異なる資格が乱立する状況を招いてきました。その遅れをぜひ挽回し、前進するリーダーになっていただきたいという思いです。

一言でいうと、本学には、関係性を大切にし、その中に生きている指導者がいらっしゃいますので、それを生かしてくださいということです。これは臨床実践を行って人々の言い方ですが、20世紀後期の近代は、産業労働が中心になって世の中が成り立っていて、自立がとても重視されました。その弊害は、関係性の中で生きる人間

の現実を軽視することになりました。21世紀は自立を強調する個性尊重の時代から、多様性・多元性を尊重しつつ、関係性・包括性の時代、違いをもつ人々が関わり合い、支え合うことによって生きていく時代になっていくでしょう。

人々が自分らしく生きつつ、関わり合うことがうまくならなければならないし、情報の処理も上手にならなければならないという意味で、多分野の多元的な視点を取り入れることができるような人を育てることが必要でしょう。心理臨床の目的は、自立した人間を育てるだけではなく、先ほど学長先生が言われたは「協働」ができる人、自から生き方を企画しながら他者と共に生きる人の育成が必要になるでしょう。それは、1人ではできません。異なった専攻をもちながら、友好的に協働して学生を育てていくことが求められます。人々と関わり合い、人々と助け合い、学び合わなければできないという意味で、多元性のある専門職の交流と汎用性のある教育方法の確立ということは、臨床と教育が統合され、ケアを受ける人と与える人が統合され、キャリアと生活が統合され、ケア労働という誰もがやらなければならない仕事の人々の中で統合されていくことだと思っています。

その新しい動きとして、欧米諸国、特にイギリス・北欧の国々では、ケアする人とケアされる人の区別がほとんどなく、一緒になって共に育て合うというケア労働の共有が行われています。詳しくお話しする時間がないのですが、ケアする関係の中で一番専門性を持っている人は、今「患者さん」と言われているその人ではないかという視点。その人が知っていることを知らない私

たちがケアできるというのは、専門家のおごりの部分がないかとさえ言われ始めています。例えば、統合失調症という名前を付けたのは誰か、統合失調症という名前を付けた結果、人は差別されているではないか、という問いが広がっています。また、幻聴とか幻覚などと言って、「聞こえている」と言っている人に向かって、「自分には聞こえない」「聞こえるはずがない」と言ったことで、それが正しい、その人を治さなければならない、自分と同じにしなければならないという考えは、どこから来るのか？ という問いも出されています。

後で「統合失調症の新しい理解」(北大路書房)をお読みください。

最後に、英国とカナダとアメリカの心理学、心理臨床、カウンセリングの世界における大きなパラダイムの変換をお伝えして、私の発題を終えたいと思います。

2000年にイギリスのカウンセリング学会は、「カウンセリングおよび心理療学会」と名称を変更して再出発しました。学会の目的は、「トーキングセラピー、つまり語りによる治療という大きな傘の下で、訓練された専門家によって行われる効果的な変化や健康な生活の増進をもたらす短期または長期の支援」ということになっていて、目的に、治療という言葉は使われていません。2009年にカナダのカウンセリング学会は、同じように「カナダカウンセリングおよび心理療学会」と改名しました。カウンセリングとは「人間の変化を促進するための特定の専門的能力を倫理的に活用することを基礎とした関係のプロセスであって、カウンセリングはウェルネス、関係、個人の成長、キャリア発達、メンタルヘル

ス、そして心理的疾患または苦悩に対応する」という定義を掲げました。一方、2010年、アメリカカウンセリング学会は、学会名は変更していませんが、カウンセリングの定義を変えました。カウンセリングとは、「メンタルヘルス、ウェルネス、教育、そして、キャリア目標を達成するために多様な個人、家族、グループをエンパワーする専門的な関係」になっています。

こういう動きの中で、跡見学園女子大学の新学部は、先達が考えてこられたこと、心理支援の専門家が目指していることがどのように動いていくかということを見守っていただく学部になっていくことを期待しております。

どうもありがとうございました。

○松崎 平木先生、ありがとうございました。「新幹線になれ」というお言葉、ありがたかったです。それから、立ち上げから最先端まで語っていただいて、どうもありがとうございました。

続きまして野島一彦先生より、「未来に向けた4つのキーワード」と題してご講演いただきます。よろしくお願いたします。

野島一彦先生「未来に向けた4つのキーワード」

○野島 それでは、「未来に向けた4つのキーワード」ということで、新しい学部の設立に当たりまして、今後大事だと思われる四つのキーワードを中心にお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

その前に、まず跡見学園女子大学と臨床心理学の相性がいいという話をします。関東圏の女子大学では第1号の心理学部ということになっておりますが、それから、日



本心理臨床学会という3万人規模の学会と約2万人の日本臨床心理士会、その両方の団体とも約7割が女性ということで、女子大学とは非常に相性がいいという感じがいたします。

それから、一般的に、心理支援は父性性の原理(confrontation)と母性性の原理(acceptance)を中心に行われていくことが多いのですが、どちらかといいますと acceptance が非常に大事だということで、やはり女子大学と相性がいいかと思えます。

それから、跡見の建学の精神の「自律」と「自立」ですけれども、これを臨床心理学的な観点から適応という概念と置き換えますと、自律というのは「内適応」、自分の内なる適応、自立は「外適応」ということになるかと思えます。内適応というのは、国で言いますと内政が安定しているこ

と、外適応というのは外交が安定していることなのですが、そういう意味で、跡見の精神の自律と自立ということは、臨床心理学で大事にされます内適応と外適応ということと非常に近いということで、やはりこの跡見の大学と臨床心理学は非常に相性がいいというのがまず最初でございます。

次に、心理学部は今年度10名の教員で担当するという形でスタートしております。この10名の教員は、一方で学部教育と、他方で大学院教育と、両方を受け持つということになっておりまして、学部の臨床心理学科は4年間の学生定員が480名ということで、その大きな流れは、過去16年間の文学部臨床心理学科の充実拡大を図るということと、今年度から始まりました公認心理師の養成に対応するというので25科目設定されておりますので、これを組み入れながら学部がスタートしたということになります。

大学院は、臨床心理学専攻で学生定員が24名ですが、これは臨床心理士の養成をこれまでどおりに継続するとともに、新たな公認心理師対応を行うということで、10科目が新たに追加されております。ですから、大学院はダブル資格を目指してという形でこれから進んでいくこととなりますが、この学部・大学院を10名の教員で担当してこれから進んでいくということになっております。

今後、未来に向けてということで四つのキーワードを挙げております。一つは多様性、二つ目に異文化交流、三つ目に連結、4番目に地域貢献ということで、これについて少し詳しくお話ししたいと思います。

多様性ということとは、いろいろな観点か

ら多様性ということ論じることができるのですけれども、まずは臨床心理学の理論の多様性ということですね。臨床心理学を支える三大理論、三大流派というのがございまして、人間の無意識を対象にする精神分析、目に見える形の行動を対象にする行動主義、人間の持つ意識に焦点を当てます意識の心理学であります人間性心理学ということですが、この三大流派と、その他いろいろあります。私は、無意識、行動、意識の3点セット全てが人間理解の観点として必要だと考えておりますし、そういう意味で、教育においてもこういう多様な形の学習をすることが大事だと思います。

2番目に、学習形態の多様性ということですね。臨床心理学を学習する際の形態としましては、普通、大きく五つに分けられます。認知学習ということで、講義を受けたり読書をしたりして知識を身に付ける。観察学習ということで、実際にやっている場面を観察して学習する。体験学習ということで、自分の基本的な心の体力、体質を強化するような形の体験学習。それから実習経験、さらに実習経験を検討するというので、通常、スーパーヴィジョン、あるいはケースカンファレンスという形で行いますが、こういう五つが少なくとも学習の形態としてありますが、こういうものを偏らずに多様に取り入れていくことが必要だと考えております。

それから、臨床技法の多様性ということですね。これまでではどうしても個人臨床ということで、1対1で、密室の中でカウンセリングをするというイメージが強いのですけれども、個人臨床に加えまして、二つ目に、3人以上の人がいる中でいろいろな

関係性を扱っていくグループ臨床。3番目が、さらにそれをコミュニティ、地域に広げまして、コミュニティ臨床と呼びますが、やはりこれからは個人臨床だけではなくてグループ臨床、コミュニティ臨床と、この三つの全ての技法が使えるという形で行く必要があると思っております。

次に異文化交流ということで、まず1番目に学部間交流ということです。心理学の学部は関東圏内に結構たくさんありますけれども、そういう他大学の心理学の学部なりと一緒に、例えば合同の卒業論文発表会とか、何か他大学を知るといった形で異文化交流をすることで、自他の違いが分かりまして、非常に刺激されていい学習になるのではないかと思っております。私が学部時代は、九州大学では九州地区の各学部の学生たちが集まって合同の勉強会なりをやったりしておりましたし、こういうことは可能かと思われまます。

2番目は大学院の合同事例検討会です。大学院レベルになりますと、これは私が来ましてから、2012年からスタートしております。各大学の大学院でケースを担当している人たちが集まって合同で検討会を行うということで、第1回が2012年で、立教大学、文教大学、跡見学園女子大学でスタートしました。その後いろいろ変遷がございまして、直近の第7回が2018年に行われておまして、青山学院大学、東京家政大学、埼玉学園大学、跡見学園女子大学という形で開催しております。こういう形で、自分のところだけでなく他のところと一緒に学び合うということが、異文化交流として非常に有効だと思います。

3番目は、まだ制度的に確立されてお

りませんが、単位互換ということを考えていく必要があるのではないかと思います。つまり、一つの大学だけで多様な学生のニーズには応じきれないわけです。ですから、各大学いろいろ特色がございまして、単位を互換するという形で他大学に出掛けて行って、自分の大学で足りない部分を勉強する。そういう形の異文化交流がこれから必要ではないかと考えております。

3番目が連結というキーワードです。連結といいますと、まずは学部教育と大学院教育の連結ということになります。とりわけ公認心理師養成は、学部教育と大学院教育をワンセットとして行うということになっておりますから、学部教育と大学院教育の流れをきちんと設定して、連結を大事にしていくということが一つ目です。

二つ目は、養成段階と研修段階の連結ということで、大学院生で言いますと、大学院で学んでいる段階が養成段階でして、修了した後に研修段階と呼びます。これを連結するという形で、つまり大学院を出た後もちゃんと研鑽していく機会を持つ必要があると考えておまして、実際、現場でわれわれがやっているところでは、一つはOB・OGカンファレンスです。大学院修了後は自己研鑽する機会が少ないことから、月に2回、木曜日と土曜日、OB・OGカンファレンスを開催しております。そして、そこには院生も参加可能にしております。というのは、大学の学内実習施設だけですと扱うケースが限られますので、そういう意味でOB・OGカンファレンスに参加して、いろいろな現場でのいろいろなケースについて学ぶということで視野を広げることができるということになります。

それから、臨床心理査定研究会ということで、これも修了生と院生が参加し、査定をめぐっての勉強をするということになっております。

3番目が中堅心理士の会ということで、特に臨床心理士資格を取ってから5年後の1回目の更新をした、ある程度経験を積んだ修了生を対象に、月に1回、土曜日に開催しております。こういう形で、大学院時代と大学院を出た後を連結するという形で教育体制を整えていくことが必要だということが、連結ということでございます。

最後に、地域貢献です。大学は、教育・研究とともに、地域貢献あるいは地域交流等が求められることになってきておりまして、実際、現在行われているわれわれの臨床心理学科での地域貢献はどんな形でやっているかといいますと、一つは、無料講習会ということで、年に2回、春学期と秋学期に5人の先生方が担当しまして、5回でワンセットのシリーズを組みまして、心の問題についての講習会を毎年開いております。

2番目に「おしゃべりたいむ」ということです。これは音羽パースという助産院にうちの先生方3名が月に3回交代で出掛けていきまして、お母さん方の相談に乗るという形で、おしゃべりたいむを毎月行っております。

三つ目に、「不登校を考える親の会」ということで、これは新座、文京で月に2回、不登校を抱えておられる親御さんの会が行われております。

4番目に「ふれあいカフェ」ということで、これは高齢者の方を対象として、若い院生、学部生なりと一緒に過ごすという形

の取り組みを、ここ数年、随時で行っております。

5番目に、「文京区教育センターとの連携」ということで、毎月、こちらのスタッフが出掛けていってスーパーヴィジョンをやっておりますし、年に数回、保護者の会をやっておりますし、さらに、教育センターのスタッフの研修を担当するというのをやっております。

6番目に、文京区のひきこもり支援のネットワークに対してもわれわれが参加して、コミットするという形を取っております。これは現在やっていることですが、これ以外にもっといろいろとやるのがこれからも出てくるかと思いますが、単に大学の中だけで閉じられたということではなく、地域に貢献するような形でわれわれの臨床の知なりを生かしていくことが必要だと思います。

ということで、大きく4点のキーワードということで、多様性、異文化交流、連結、地域貢献という、これが未来に向けての大事な観点ではないかと考えております。

ご清聴、どうもありがとうございました。○松崎 野島先生、どうもありがとうございました。未来に向けての大きな枠組みについて整理していただきました。

続きまして、鶴光代先生から「心理専門職の連携・協働力を育てる」と題してご講演いただきます。よろしく願いいたします。

鶴光代先生「心理専門職の連携・協働力を育てる」

○鶴 今も鮮明に思い出すのは、私が11年前に跡見学園女子大学に赴任したとき



に宮崎圭子先生が、「この学祖の跡見花蹊先生という方はこんなにすごい人ですよ」と、感激的に話して聞かせてくださったことです。それから、大学ホームページや花蹊記念資料館でいろいろな作品を拝見し、「跡見花蹊日記」も読ませていただいて、すっかり花蹊先生に惹かれていきました。こちら(写真1)が若いころの跡見花蹊先生で、花蹊先生の作品の中にはたくさんの魅力的な作品がありますが、私が一番とってよいぐらい好きなのが、秋虫瓜蔬図(しゅうちゅうかそず)(図1)です。へちま、かぼちゃ、なすびといった野菜類のなかに、秋の虫が描かれています。ちょうちょ、せみ、きりぎりす…、ここに描かれている虫を全部を探せるか、言い当てられるかというので、クイズ形式で学生と楽しんだことがあります。跡見学園女子大学で日本心理臨床学会の第28回春季大会や日本

臨床動作学会第20回大会を開催するときプログラムの表紙に使わせていただきました。今度、松崎先生が開催される第119回日本小児精神神経学会でも花蹊先生の作品を表紙に使われ、宮崎先生が開催される日本臨床動作学会第26回大会でもその予定と聞いています。花蹊先生に、感謝ですね。



写真1. お若いころの跡見花蹊先生

(<http://www.atomi.ac.jp/progress/atomikakei/>
2019年1月26日)



図1. 秋虫瓜蔬図(しゅうちゅうかそず)

(<http://www.atomi.ac.jp/univ/museum/collections/>
2019年1月26日)

私は存じ上げなかったのですが、旧伊勢屋質店を跡見が学生の教育のため、また地域貢献のために買い取られて、「菊坂跡見塾」にして、今、公開されているそうで、すごく感激しました。この質屋は、樋口一葉が駆け込み寺的にしょっちゅう通っていた質屋ということで、昔、見に行ったことがあります。この質屋さんの前に細い道路があって、ずっと下っていくと一葉が住んでいたところに出るんですね。私にとっては非常に思い出のあるところで

す。

跡見が、花蹊記念資料館をはじめとして、いろいろな形で日本の文化に貢献していることを実感したところです。

さて、もう一度、花蹊先生の話に戻ります。「跡見花蹊日記」(www.atomi.ac.jp/univ/kakei/)の大正2年日記に、下記のこと

「四月三十日 辛巳 水曜 曇。

朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、台湾小畑照世 其母と、中村翁と(衍)結婚して其婿と来る。」

この中村翁しげるというひとは、中村古峡(本



写真2. 菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)

(www.atomi.ac.jp/univ/about/campus/iseya.html 2019年1月26日)

名は翁)であるとされています。中村古峡は、初めは文学者として漱石の門下生として活躍していましたが、そのうち心理療法に関心を持って、精神医学を勉強されて、日本精神医学会の学術雑誌である『変態心理』の主幹を10年ぐらいされました。変態心理学というと、変な感じもありますが、今で言い換えれば異常心理学ということになります。

さて、中村古峡先生が昭和20年代に催眠の特別講演をされていたとき、私の恩師の成瀬悟策先生がそこに参加して、催眠現象を目の前にしてびっくり仰天して、人間の心理でこんな面白いことがあるのかということで、それから催眠研究に没頭して、世界的な催眠研究者になったということです。その催眠研究の中から、50数年前に、成瀬先生は臨床動作法を開発され、今では、日本生まれの心理援助法として、世界のあちこちでも使われています。今日、申し上げたいのは、跡見に勤めたことで花蹊先生を知り、臨床動作法をしていたおかげで花蹊先生との間接的ではあるが、自分なりの繋がりを見いだせた喜びです。

こうした自分のひとり活動による喜びは、幼児がひとり遊びに夢中になっている心理と通底りよくしており、人間力を育てる原動力となっていると思います。2015年に、公認心理師法が制定され、2018年の今年に公認心理師試験が実施されます。また、今年、大学、大学院で公認心理師養成教育カリキュラムがスタートしました。

そこで学ぶことは、心理学であり、臨床心理学、心理実践力といえると思います。ここでは、ひとり活動としての学びとともに共同活動を通しての学びが必要となりま

す。両活動を通しての人間力が育つ教育を目指しますが、本日は、心理専門職の連携・協働力を育てることを中心に話します。

心理学は、人の心の理の学問というわけですから、それを学べば、「自分のことが分かる・人のことが分かる」ということになるわけですが、そうなるためには、単に、知的に学ぶだけではなくて、演習や実習を通して体験的に体得していく過程を経なければなりません。

例えば、ストレスのメカニズムを学び、どう対処したらよいかも学びます。その対処の一つはリラクセーション力であること理解し、自分自身がリラクセーション力をつけていくことが重要となります。また、心の痛みや怒りを学問的に学ぶなかで、感情コントロールの必要性を知り、感情コントロール力が増していくことが大事です。心理援助では、相手を受け入れ共感するコミュニケーション力や人間信頼感を身につけていきます。それらの力をつけていってこそ心理援助ができるようになります。すべて、体験的学習の積み重ねで、力をつけていくわけです。

さて、公認心理師の業務や活動については、公認心理師法で定めていますが、その一つが、表1にある第42条「連携等」です。公認心理師は、病院や学校などのいろいろな場所で、他の多くの専門職のひとと仕事をすることになります。42条では、公認心理師の業務における多領域・多職種との密接な連携の下での総合的で適切な連携を強調しています。今日、こうした連携は世界共通的に重要視されており、その実践が進んでいます。例えば、医療現場での連携・協働は、「チーム医療」という形で進んで

表1. 公認心理師法 第四十二条

公認心理師法 (2015年公布 2017年施行)
(連携等) 第四十二条 公認心理師は、その業務を行うに当たっては、その担当する者に対し、保健医療、福祉、教育等が密接な連携の下で総合的かつ適切に提供されるよう、これらを提供する者その他の関係者等との連携を保たなければならない。

おり、もうなじみになってきています。教育関係では、「チーム学校」ということで、多様な専門性を有した教職員、専門スタッフが協力関係を築いていくことや地域との連携体制の整備を目指しています。

医療では、医師、看護師、その他の専門職者、例えば、診療放射線技師、理学療法士、薬剤師、管理栄養士、作業療法士、言語聴覚士、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、臨床心理技術者等、いろいろな医療スタッフによって行われます。そうしたスタッフの一人一人が対等に連携・協働することで医療の質が上がっていくとされています。チーム医療は、誰のためにあるかということ、患者、利用者、家族のためにあるし、いわゆるコミュニティという社会のためにもあるわけです。その支援のためには、いろいろな職種の間で共通の目標を設定して、その目的を達成していくことが大事です。そのためには、スタッフ間のコミュニケーションが重要となります。このコミュニケーションこそ、心理学を学ぶ若い人たちが理論と実践を通して体得していくものだと思います。

ところが、このスタッフ間のコミュニケーションがなかなかうまくいかず、連

携・協働が難しくなるということが起こります。例えば、職種間での認識のずれが起こります。患者に対して「あの人は、自分勝手なわがままだ」というある医療スタッフの認識と、「あの人は苦勞しすぎて自分を押しさえすぎてきた反動が、今やっと自分の本音として出せるようになった」という臨床心理士の理解とには大きなずれがあります。このずれは、ほかの医療スタッフ側に「心理の人は患者を甘やかすから困る」という認識を生み、そして、臨床心理士側には「説明しても分かってもらえない」という認識を生じさせかねないわけです。こうした問題点をチームのなかで解決するには、コミュニケーション力、調整能力、問題解決能力が必要とされています。これらの力はどうやって付け行けばいいのでしょうか。

話は少し変わりますが、多職種連携における心理職の課題を検討してみましょう。他の職種の人から連携・協働において役立つとされているのは、心理アセスメントと心理療法ということです。ゆえに、連携・協働というとき、まずこれらができることが必須です。他の職種の人に「やはり心理の人は違うな」と思ってもらえるような活動ができれば、そこで一つの信頼を得ます。それが連携の基礎になるわけです。

他の職種の人から見ての課題なのですが、医学・医療に関する知識不足、他の職種に関する認識不足が挙げられています。また、自分の役割に対する自覚が弱い。つまり、心理職というのは、例えば医療の中では、国家資格でないので健康保険による診療報酬を請求できる専門職とはなっていません。それゆえもあって、なかなか立ち

位置が難しいところがあり、自分はどのような役割を取るべきかが不確となりやすい。

それから、よくいわれるのはコスト意識の低さ。これは社会性が低いという評価につながっていく側面を持っています。それから、プライドの高さということも挙げられています。このことは、臨床心理士の養成教育のなかで、専門家としてちゃんと自覚を持ってプライドを持ってやっていきましょうと指導しているので、悩ましいところですが、自分のプライドが、他者からはどう見られているかという客観的・合理的な把握力を身につけていくことも、大事な点だと思っています。

この多職種間での連携は重要であるが難しいという状況は、世界的に共有されていて、それゆえに、専門職連携教育が盛んに検討されているところです。

専門職連携実践で必要とされる能力は、多職種連携コンピテンシー(能力)と呼ばれています。このコンピテンシーは持って生まれた能力ではなく、学習により修得し、第三者が測定可能な能力とされています。ここが面白いところで、つまり、この教育をするときは目標を定めて、その目標の到達度をきちんと測るところまでやって、専門職連携教育だというわけです。大学ではシラバスでそういうことを示しているわけですが、これをしっかりやっていくということですね。

図2は、多職種連携コンピテンシーを図示したのですが、一番真ん中が「患者・利用者・家族・コミュニティ中心」となっています。このことは、「患者・利用者・家族・コミュニティ」を中心にして、「職種間で共通の目標を設定することができる

能力」のことを指しています。患者・利用者・家族・コミュニティのために連携するわけで、そのためには、「職種間のコミュニケーション」が必須となります。そして、その周囲に、「職種としての役割を全うする」、「関係性に働きかける」、「自職種を省みる」、「他職種を理解する」という能力が置かれています。多職種連携教育におけるコンピテンシーの観点が明確に示されていて、大いに参考になります。

さて、日本での多職種連携教育の先駆けの実践を紹介いたします。それは、「亥鼻 IPE(専門職連携教育)」として展開されているものです。「亥鼻」は、千葉市のある地区の名前で、「いのはな」と読むそうです。言われてみれば、イノシシの「亥」

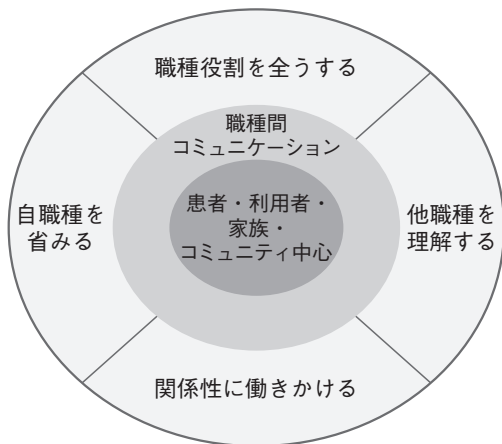


図2. 多職種連携コンピテンシーの対象者：
医療保健福祉に携わる職種

(多職種連携コンピテンシー開発チーム 2016)
(http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/mirai_iryu/pdf/Interprofessional_Competency_in_Japan_ver15.pdf#search=%27%E5%A4%9A%E8%81%B7%E7%A8%AE%E9%80%A3%E6%90%BA%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%94%E3%83%86%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%BC%E9%96%8B%E7%99%BA%E3%83%81%E3%83%BC%E3%83%A0%EF%BC%882016%EF%BC%89%27 2019年1月26日)

に「鼻」ですからね、なるほど！です。これは千葉大学の看護学研究科が中心になっておこなっていることです。自分自身のリーダーシップや多分野・多職種連携能力を磨くための専門職連携教育として、教育プログラムを作成し実践されています。ユニークなのは、医学部、看護学部、薬学部の学生は、1年生から4年生までこのプログラムに全員参加ということです。このプログラムの演習・実習のときには、3～4人で一つのグループを作りますが、そのときに、必ず医学部から、看護学部から、薬学部から1人以上入るわけです。そこには、学部の違う3～4人の学生でグループを作って、学生の1年生のうちから異なる専門領域の者で学び合う、異なる専門領域の者で助け合う、理解を深める、信頼を育むという教育目標があるわけです。このシステムは非常に素晴らしいと思います。

プログラム構成は、次のようになっています。

Step 1 (1年次)

「ふれあい体験実習」：グループで各病院に訪問し、患者に話を伺うチームメンバーそれぞれの専門領域の役割機能を理解し尊重できる

Step 2 (2年次)

実習に行く
別々の施設で実習した2グループで話し合うチームメンバーそれぞれの職種の役割・機能を把握し、効果的なチームビルディングができる能力を身につける

1年生の「ふれあい体験学習」は、病院

や施設などに行き、患者さんとか施設の利用者の人のお話を聞く。お話を聞きに行く前に、前準備で、基本的なコミュニケーション技術の習得を目指すということをするそうです。

各病院を訪問して、患者さんから30分程度お話を聞いて、戻ってきて、グループごとに患者さんがどのようなことを言っていたか、いろいろなことを振り返る。そして、まとめるときは3～4人でまとめて、振り返りのときは2グループがユニットを組んで、学生は7～8人で、教員や職員(専門技術者)が参加して話し合うというスタイルを取ることが多いそうです。

2年生では、最終的には自分たちが学習したことを発表し、討議・共有して、さらに学習課題を見つけるということをされています。

3年生、4年生のプログラムは次のようになっています。

Step 3 (3年次)

患者・サービス利用者、医療専門職間の対立を理解し、問題解決ができる能力を身につけるステップ

Step 4 (4年次)

患者・サービス利用者を全人的に評価し、患者・サービス利用者中心の専門職連携によって診療・ケア計画の立案ができる能力を身につけるステップ

3年生のこのプログラムは大事ですね。患者やサービス利用者と職員が対立することがあるわけです。私たちも、患者として病院に行き医師と対等にいろいろな情報

交換ができたと思えることは多くはないです。言いたいことの半分も言えなかったなと思って帰ってくるわけですね。ここは、そういう患者・サービス利用者と医療専門職の間の対立を理解する、どういう溝があるのか、どういう対立関係があるのか、それを解決するためにはどうしたらいいのかというようなことが中核になります。

4年生になると、上記にあるように、最終的には、患者・サービス利用者中心の専門職連携によって診療・ケア計画の立案ができることが目的になります。

この4年生の実習では、模擬患者さんと面接して、現在の状態とか入院前の生活とかを聞いて、退院計画を立てる上での患者の意向を集めるという作業をします。これも、医学部の人、看護学部の学生、薬学部の学生がそれぞれ参加しています。

また、自分たちの立てた計画がより専門職の目から見るとどうなのかということで、実際の専門職の人に聞きに行き意見をもらうという、専門職へのコンサルテーション作業もします。

そして、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカー、管理栄養士、カウンセラー、遺伝カウンセラーなど、各専門職の意見を参考に、最終的な退院計画を作成するために学生同士で話し合いまとめていきます。そして、それを発表会で披露するというような計画になっています。

以上、「玄鼻 IPE(専門職連携教育)」の紹介をさせていただきましたが、心理専門職教育に、このプログラムを少しでも取り入れられないかということで、一緒にみんな考えていきたいと思っているところで

す。これをやろうとすると、全学的なことですから、全学の理解と協力が必要になります。学部をまたいで、専門職になる人たちの連携・協働ということ、学部のうちから教育していきたいものです。学部をまたいで、亥鼻 IPE の精神を盛り込んだ実習ができるならば、心理職は各分野でもっと活躍ができ需要も高まるのではなかとと思います。

最後の写真は、10期生ですね。卒業と書いてあるところが愛嬌ですね。大学院だから本当は「10期生の修了を祝う会」です。毎年、修了を祝う会の後にこういう写真を撮っていると思いますが、これは節目の10期生です。この人たちは、今度20期生がこういうことをするときには10年たっているわけですから、どのくらい成長しているか。連携・協働がどのくらい上手になっているか。この人たちに今からメールを出して、「10年後を聞かせてくださいね」と言いたいと思っています。

以上です。どうもありがとうございました。

○松崎 鶴先生、ありがとうございました。これからの連携・協働のコンピテンシーを育てるための形の可能性をお話しいただけたと思います。

それでは、ご登壇の先生方、台の上によりしくお願いいたします。ご紹介が遅くなりましたが、今、パワーポイントの操作をしてくださっているのは、去年度から新任で来ていただいている新井先生です。よろしく申し上げます。

ディスカッション

○松崎 では、先生方、どうもありがとう

ございました。ちょっと時間が押しているのですが、私、ちょっと質問しようと思っていたのですが、フロアにこれだけ先生方がいらっしゃいますので、まずフロアの方でご質問やコメントがおありの方は挙手をさせていただいてお受けしたいと思います。いかがでしょうか。勇気が要ると思いますが、どうぞ勇気を振り絞って。どんな素朴な疑問にも、先生方はきっと答えてくださると思いますが、いかがでしょうか。

では、皆さん、ちょっと考えていただいて、私が質問したかったことを先に質問させていただきます。

まず、平木先生には、スライドの中で関係性とか多元性とか汎用性という言葉が出てきましたが、それを学ぶのはすごく難しいと思うのですが、そのあたりの具体的なアイデアがもしあったら教えていただけたらいいなと思います。

それから、野島先生には、跡見学園女子大学が専門職養成ということをすごく一生懸命始めたわけですが、専門職としてではないけれども心理学の知識と技術を生かしていけるという道もあると思うので、そのあたりについて、これからどう進んでいったらいいのだろうかというあたりをコメントいただけたらと思います。

鶴先生には、二つのコンピテンシーという大きなこれからの能力みたいなことが示されましたけれども、具体的ところで、今、医療の中でこんなことができるということが出てきましたけれども、臨床心理の中でどんなことができるかという話がいただけたらと思います。よろしく申し上げます。皆さん、質問を考えておいてくだ

さいね。では、よろしくお願ひいたします。

○平木 関係性も多様性も汎用性も抽象的な言葉で分かりにくいので、具体的にというご希望ですが、私が関係性と言うときは、私の専門の家族療法の視点から説明すると分かりやすいと思われまふ。個人でも家族合同でも面接しますが、面接の中で影響を受け、しかも関心を持つのは、一言でいうと、そこで訴えている人たちの問題は個人の問題ではなくて関係がつくる問題だということだ。関係がつくる問題とは、別の言い方をすると、誰かと誰かが関わっているときにいつの間にか悪循環のコミュニケーションに陥ったり、「相手がおかしい」とか、「自分がおかしいのではないか」と悪者づくりをすることだ。その悪循環のコミュニケーションというのは、例えば、「私はこうしたい」と本当は言いたいのだけれども、「あなたはこうしない」と言う。「私はこうしてほしい」と言いたいのだけれども、「あなたは何でこういうふうにするのだ」と責める。そんなコミュニケーションから、相互の責め合いになる。責め合いになると、ますます、攻撃の勢いも増し、関係が分裂するまでに至るのです。

その結果は、誰かが症状をもったり問題があることになったりします。そこにかかわっている人々は、自分の思ひを伝えているのですが、違いがあったり、理解できなかったりすると、誰かが悪いことになる。つまり、関係性が問題を創るということではないのか。問題は、相互に自己主張を繰り返すことで、問題は変わらないのに関係はますます悪くなり、問題も大きく、重くなるのです。誰も悪くないのに、関係性をどうつくっていくかということだ。躓いてい

る。コミュニケーションの問題を解決しませんかというわけだ。

関係性をどうつくるかということになると、ゼミでも、私たちの日常生活でも、友だちとのつき合いでもあり得ることだ。あちこちで起こっていることだ。私は最近学生と接することがなくなったのですが、現代は面と向かって話し合うことが減っているからか、社会規範が個人を苦しめているとか、違いを理解する相互交流が少なくなっていることに問題があるかもしれない。私がアサーショントレーニングをする目的もそこにあるのですが、それは関係性をつくることの大変さと意味を考えた支援だ。

一人ひとりが個別性を持ちながら、つまり多様性の中で他の人と一緒に生きていけるというのは、汎用性が必要なわけだ。誰にでもある程度対応できるようになる。その誰かにある程度対応できるようになるのも、コミュニケーション能力だと思ひています。

○松寄 ありがとうございます。では、野島先生、お願ひします。

○野島 専門職という形をちょっと強く強調してお話をしましたけれども、臨床心理学で専門職を目指す人は、これまでの経験ですと、たぶん120名中で1割くらいなんです。そして、その1割の12名が大学院を修了するということだ。跡見だけで修了するわけではありまふけれども、他大学の大学院に行く人も含めると、大体1割くらいだと思ひます。

この臨床心理学でわれわれがイメージしているのは、もちろんそういう心理専門職、プロフェッショナルを養成することが

一つのミッションだと考えておりますけれども、それに加えて、あと二つのタイプの人を育てるということもミッションだと考えております。

二つ目は、心理学あるいは臨床心理学の知識を仕事に生かすということで、今まで話題になっておりますコミュニケーション能力とか、対人スキルとか、心理学的な知識を販売なりの対人的なやりとりの中に生かすとか、あるいは何か企画するとき心理学的な視点を生かすとか、マーケティングリサーチみたいなところに心理学的な知識を生かすとかいう形で、心理学の知識と技術を学ぶことを通して、それぞれの方が就いたいろいろな仕事の中で、そこで得られた知識と技術を生かして、自分の仕事をより有効にやっていけるようにという形で、ワーク、仕事に生かすということが二つ目のミッションだと考えております。

三つ目は、プロフェッショナル、ワークとともに、今度は長い目で見ますと、ライフ、人生に生かすということで、うちを卒業した人たちは、仕事と別に、例えば結婚したりして、そうすると家族ができるわけですが、家族とどうやって仲良くやっていくか。あるいは、子育ての中で、子どものことをどのように理解していくか。あるいは、最近は介護の問題等がありますが、介護なりという場合にそういうことに対する知識なり技術なりという形で、自分自身があまり不調にならずに、メンタルヘルスを維持しながら人生を充実して生きていくにはという形で、心理学の知識を生かしていく。そういうライフに生かすというのが3番目のタイプと考えております。

ですから、プロフェッショナルに生かす

ことと、ワークに生かすことと、ライフに生かすということ、この三つのことを目指していろいろ勉強していくということ、われわれは想定して、そういう気持ちで教育に当たっていくということをしていきたいと思っております。

○松崎 ありがとうございます。鶴先生、お願いします。

○鶴 二つのコンピテンシーについてということで、先ほどもちょっとお話ししたのですが、患者、利用者、家族、コミュニティのため。これが中心で、それぞれの職種の間でどういう目標を立てることができるか。

例えば、不登校の子でしたら、担任の先生、生徒指導の先生、校長、副校長、養護の先生などが関わるわけですね。それに保護者が関わってきます。そして、スクールカウンセラーが関わる。そうすると、そのときに、例えば養護の先生は、この子は体が弱いから1限目から6限目まで学校にいることは大変疲労が重なるので、できたら週に数日、何時間か通うようにしたほうがよいという意見を述べる。一方で、担任あるいは生徒指導の先生は、ちょっとそれでは生ぬるいのではないかというようなことがあったり、それでは授業に遅れるとかいうようなことがあるわけですね。

それから、保護者としてはなるべく学校に行かせたい、授業にもついていけるようにしてほしいというのですが、スクールカウンセラーから見たら、この子の体が弱いということもあるかもしれないけれども、それよりもやる気というか、前向きというか、今の現状に対してやる気を失っている、諦めている、自分は駄目な人間だと

思っている。そこからの支援が必要ではないかというふうに、それぞれが少しずつ自分が目指す力点の置き所が違うわけです。

それを全員がなるべく率直に出して、そこで共通点を見いだす。そのときに、必ず学校本意ではなく子ども本位で共通点を見いだすことが大事だということが強く言われているわけです。それが強く言われるということは、これまで私たちは、そういうことは知識としてあっても実践を十分にしていなかったという反省があると思います。

それから、ではそういうふうにするためには、職種間のコミュニケーションが重要です。ここで、子どもについての情報の共有だけではなくて、自分たちの考え方、価値観、何を大事に考えているかということをお互いに伝え合うことができる能力なのです。だから、例えば、「黙っているけれども分かってください」みたいなのは分からないので、何らかの表現をしてとにかく伝え合うという力、その能力を学生の時代に身につける。そして、もちろん専門職として働きだしても、一生涯このことは自分で研鑽していく。グループ、集団、横の関係で研鑽していくという意識を持ってやっていきましょうということだと思います。

○松壽 ありがとうございます。では、先生方の番です。どなたかご質問とか、コメントとか、いかがでしょうか。ありがとうございます。青山学院、平山先生です。マイクをよろしくお願ひいたします。マイクをお持ちの先生は、今年から新人の板東先生です。よろしくお願ひいたします。

平山先生、よろしくお願ひいたします。ご所属とお名前をお願ひします。

○平山 青山学院大学心理学科の平山です。先生方のご発表をお聞きしていて、非常に刺激的でした。跡見学園女子大学では、時代を見越すかのように、どうして臨床心理学科ができて、そして、どうして心理学部ができたのだろうと考えながら、お話をお伺いしておりました。なかなか難しいところを実現してこられたのをお聞きして、連携・協働とか、自分たちのアイデンティティーを掘り下げていくとか、そして、自分たちのアイデンティティーを追い掛けて社会に浸透していくとか、そういった動きを感じました。

跡見花蹊先生の、最初の、花とか虫とかいろいろなものが一緒に一つの世界をつくっているのだというお考えや、そういう連携、多職種連携の重要性。また、学生さんの教育についても大学院での濃密な教育訓練だけでなく、OB・OGカンファレンスがあって、臨床心理の査定の研修会があって、さらに中堅の心理士の研修会があってと、非常に濃密な研修が卒業後も展開しておられる。地域貢献というところでも、講演会が年に2回開催されていたり、5回シリーズであったりと、こちらも非常に幅広く、地域に浸透されている。他にも、おしゃべりたいむとか、不登校を考える親の会とか、ふれあいカフェとか、教育センターとの連携など。

これから心理専門職が国家資格化されていくときに、連携や、複雑に交流していった展開していく力が必要になることが理解されてきました。また、そうした視点と力が、跡見学園女子大学の心理学部をつくったのだなと感じるとともに、非常に多くの示唆を受けたと考えております。

○松寄 貴重なコメント、ありがたいコメント、ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

○宮崎 跡見学園女子大学の宮崎です。運営委員の1人で、あまり挙手するのはNGかなと思うのですが、どうしても聞きたい。

先ほどの鶴先生の亥鼻モデルですかね。あそこで、聞き漏らしていたら申し訳ないのですが、学生さんたちがあのような授業形態で受けているのかとすごくびっくりしたのですけれども、教員は、各三つの学部から1人ずつ出ているとか、教員のほうのお話でもし知っていることがあれば教えてくださいというのが1点です。

もう1点、さっき野島先生がおっしゃいました、うちの心理学部は三つのモデルを追い掛けていて、プロフェッショナルと、ワークと、ライフと。ワークというのは一般就職、会社に勤めるという人たちのことを指しているのですけれども、ワークに進まれる学生さんたちにとって心理学部としてのキーワードになるようなものというのは、お三方の先生は何を思っているのか。もしお考えがあったらお聞かせください。

○松寄 では、鶴先生からお願いいたします。

○鶴 教員は、例えば最初の十数回のプログラムの中で、最初は講義があるんですね。そうすると、各学部からお一人ずつの先生が講義に出られてされるみたいです。それから、実習指導の場合は、またそれぞれの学部からのその担当の先生たちが出られる。そして、いわゆる教員資格のある講師だけではなくて、理学療法士とか、作業

療法士とか、時によたらいろいろな専門技師さんとか、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカー、管理栄養士、遺伝カウンセラーとか、そういうような人が必要に応じて質問や意見を受ける、指導するという形で関与されているということです。

ここは見学制度があって、常に見学可ではなくて、この期間は見学可ですよというがあるので、一回私も見学に行ってみようと思うのですが、先生、一緒にいかがですか。

○宮崎 よろしくお願ひします。

○松寄 ありがとうございます。では、もう一つのご質問のワークに心理学を生かすためのキーワードについて、各先生。平木先生から伺ってもいいですか。就職とかお仕事をするときに心理学の知識と技術が……。

○平木 そのお話を聞いているときに思い出したことを一言。鶴先生がお話しされたことからの連想なのですけれども、私は学生たちがどういうキャリアを送るかということはキャリアカウンセリングのテーマでもあるし、心理学科のテーマでもあると思っています。その中で私が感動している事例として、コラボレーションとか連携とかということと同じことをお話しします。組織開発の分野で注目されている星野リゾートの社長の試みです。

「プロフェッショナル」というテレビ番組に取り上げられたのでご存じの方もいらっしゃるでしょうが彼のホテル経営では、社長からベッドメイキング・料理長や食堂のサービス係まで、斜め割りのミーティングをされます。社長も出ていれば、お掃除の方も出ている会議で、それぞれの

立場の人々が自由に発言して、ものごとが決まっていくのです。

肩書とか権威とか専門性とかというようなことにこだわらないで、私がさきほど自分が企画体になるといったことなのです。「私はこう思っているのですが……」と言える学生を育てるということのような気がしています。アサーションに近いことを言っています。

○松壽 ありがとうございます。鶴先生、お願いします。

○鶴 連想で思い出したのは、今でもそうですけれども、跡見で授業をするときに意見を言ってもらうわけですね。「その意見の根拠は何ですか」とよく聞いていたのです。なぜそういうことを言うのかが分からないから、なぜそういう意見になったのか、その根拠は何かと聞いていたので、陰での私のあだ名が「根拠先生」ということになっていました。

面白いのは、今、多様性ということですが、他の先生の授業のときに、私のゼミの学生が手を挙げて、「根拠はないけど言ってもいいですか」と聞いたら、その先生は「どうぞ、どうぞ」と言ったというんですね。だから、そういうのが多様なかなと思いますし、それから、コミュニケーションということになると、率直に言えばいいと言うほど世の中が単純ではないので、率直に言うと、この人はこういう反応をするだろうと。だから、そうなる行き詰まるので、目標を達成するためにはどういう回り道をするかとか、どういうふうにこちらが接触すれば、その人がドアを半分ぐらい開けて受け入れて聞く気になるかとか、どういう側面から話をすると、「ああ、

分かった」というふうに理解が進むかとか、そういう多様な、いわゆる単純なコミュニケーションではないということ、学生の中に学んでいくのではないかなと思っています。

○松壽 野島先生、お願いします。

○野島 ワークに進む人にとってのキーワードということですが、僕は理解と関わりとっております。理解というのは、自分を理解するとか、他者を理解するとか、集団を理解するとか、社会を理解するとか、そういう理解するで、どう臨床心理学科の中で身に付けていくか。関わりという場合は、自分のセルフコントロール、自分に対する関わりとか、自他関係での関わりとか、集団での関わりとか、コミュニティでの関わりとか、組織での関わりとかという形で、大きく言いますと、理解することと関わることを、この二つのことを臨床心理学科の中で身に付けて、それを持ってワークに進んでいくことがきっと役に立つのだと思います。

○松壽 ありがとうございます。はい、平木先生、どうぞ。

○平木 すみません。キーワードを言うのを忘れていました。「違いを間違いにしない」ということです。違っていいということとは間違いではないということなのです。

○松壽 ありがとうございます。あっという間に時間が来てしましまして、最後に一言質問すると先生方にお伝えしてあるのですが、今、国家資格とかといって、跡見学園女子大学の心理学部ができた、ちょっとお祭りムードで浮き足立っている感じもするのですけれども、ここだけは絶対押さえて、気を付けなさいというポイントがあ

りましたら、ぜひ一言ずつお願いできたらと思います。

○鶴 心理学部開設はお祝いムードで盛り上がり過ぎて当然ですよ。公認心理師受験もちょっと気が高ぶりますね。自重しなさいというより、そのうち現実が目の前に迫ってくるので、浮き足立っているわけにもいかないのだから落ち着いてくるのではないのでしょうか。実は、野島先生と私は事情があって受けないのですよ。だから、落ち着いているでしょう！

学生も、公認心理師の教育というのはいすごく厳しいので、授業もたくさんあるので、もうそろそろ浮き足立っている暇はないのではないかと思います。

○松寄 ありがとうございます。野島先生。

○野島 そうですね。思うのは、学生なりに向けていろいろと期待とあれを語っておりますけれども、まずは教員自らがそれらを実践していかないといかんということをお戒したいと思います。

○松寄 ありがとうございます。平木先生、お願いします。

○平木 鶴先生のお話を聞いて分かったのですが、ここにいる3人は受けないのですが、公認心理師は私には、もう必要ないと思っています。私だけが変なことを言ったとしたら、受けないからだと思っていただいて、皆さん、本当に頑張っていただきたいと思います。

○松寄 私が何か浮き浮きしているんですね。皆さん、ありがとうございました。

もうお時間が来てしまいました。3人の先生方にもう一度拍手をよろしくお祈りします。

ありがとうございました。

○前場 ご登壇の先生方、フロアの皆さま、誠にありがとうございました。時間の関係上、これをもちましてフリーディスカッションのお時間を終了したいと思います。

今回のシンポジウムの開催に当たりまして、跡見学園校友会一紫会さまと特定非営利活動法人ポコ・ア・ポコ様よりお祝い花を贈りいただいております。この場をお借りしまして、深く御礼申し上げます。

では、閉演に当たりまして、本学副学長、神山伸弘よりご挨拶させていただきます。神山副学長、よろしくお祈りいたします。

閉演挨拶 神山伸弘先生(跡見学園女子大学副学長)

○神山 副学長の神山でございます。このたびはご講演、どうもありがとうございました。また、この場に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。

臨床心理学科が文学部の中にできましたのが平成14年で、今年が30年ですから、もう15年という年が過ぎまして、文学部から心理学部へ、学部昇格するという運びとなりました。臨床心理学を立ち上げていく、また、その中で大学院を立ち上げていくという中で、ご登壇いただいた先生方、また、遠山先生にもいろいろとお世話いただきまして、誠にありがとうございます。

そのお力添えもありまして、今、心理学部という形で、またその一つの学科として臨床心理学科が新たに出発することになりました。これから4年間、教育実践の中で、今まで臨床心理学の中で、文学部の中で培ってきたものを再確認しながら、それを発展させていくということと、新しい学部

ということになりまして付け加わった課題をさらに展開していく。こちらのほうがおそらく大きな課題になっていくだろうと思っております。大学執行部としましては、こういう学部への昇格ということになったからには、その両方をしっかりと成し遂げていきたいと肝に銘じているところでございます。

平木先生のお言葉にもありましたように、物事を小さく捉えるのではなくて大きくと。私の場合は逆に、大きく捉えるほうから先にいってしまう部分がありますもので、目先のことだと、そのようなことではないのかというような、そういうことばかりに思考がいつてしまうのですけれども、今始まったばかりのところでは今後のことを飛躍しながら言うのも何ですが、心理学部ということで、臨床心理学科1学科ということですが、これからさらに発展して、心理学部の中が充実していく形になっていくだろうと展望しております。

具体的な形で言えば、なにゆえ心理学部という形で名前を付けたのだということを学内で議論していく中で、そのうち心理学部の中には臨床心理学だけではない何かが生まれてくるのだというようなことをご示唆される先生方もおられまして、なるほ

ど、そういうことなのかということで、そういうことであるならばと思ったりすることがございます。

なにぶん少子化ということもありますから、いろいろと大学全体の中で物事を考えていかなければならないことですが、心理学部という形で学部昇格になったからには、これからその定着を図るとともに、さらなる発展を期していきたいと思っておりますので、ご参加の先生方、多くの皆さん、どうぞお力添えのほどをお願いしたいと思います。

あらためて、今日の講師の先生方、どうもありがとうございました。また、ご参加の皆さん、どうもありがとうございました。これにてこのシンポジウムを閉じさせていただきます。どうもありがとうございます。

○前場 神山副学長、ありがとうございました。皆さま、長時間にわたりましてご清聴いただきまして、誠にありがとうございました。以上をもちまして、心理学部設立記念シンポジウム「跡見学園女子大学と臨床心理学—その未来へ」を終了させていただきます。皆さま、お気を付けてお帰りください。ありがとうございました。